

障害のある子を育てる母親のレジリエンスに関する国内先行研究の概観

古市 真智子*

An Overview of Japanese Previous Literature Regarding Resilience of Mothers with Disabled Children

FURUICHI Machiko

要 約

本稿は、障害のある子どもを育てる母親のレジリエンスに関する国内の研究を概観し、得られた知見を整理することを目的としている。

抽出された9件の先行研究を研究目的別にみると (1) レジリエンスの構成要素を明らかにするもの (2) レジリエンスと諸要因との関連を明らかにするもの (3) レジリエンスに関する体験や様相を明らかにするもの (4) レジリエンス支援プログラムの開発に関するものの4つに分類できた。また、これらから得られた知見は、(1) レジリエンスの構成要素 (2) レジリエンスに影響を与える要因 (3) レジリエンスが及ぼす効果 (4) レジリエンスの高低による差の4つの視点から整理できた。

キーワード：子育てレジリエンス、母親のレジリエンス、障害児の母親支援

1 はじめに

同じようにストレスフルな体験をしても、すべての人が同じように心理社会的に不適応症状を起こすわけではない。Rutter (1985) はこのことに注目し、「深刻な危険性にもかかわらず適応しようとする現象」をレジリエンスという概念で示した。レジリエンスの定義は研究者間で一致していないが、個人の心理的な特性、あるいは個人の能力における精神的な柔軟性や弾力性、回復力といった意味を指す概念であり、「困難な環境にもかかわらずうまく適応する過程・能力・結果」(石毛、2005)、「困難な状況にさらされることで一時的に心理的不健康の状態に陥っても、それを乗り越え、よく適応している

状態」(小塩・仲谷・金子他、2002)などと定義されている。

近年、欧米をはじめとする諸外国では、多くのレジリエンス研究がなされてきている。従来、虐待や貧困など深刻な問題を対象として検討されることが多かったが、最近では、研究対象となる領域は広がりを見せており、子育てにもレジリエンスが重要であることが示唆されている(橋本・橋本・熊井、2011)。

我が国においても子育てを対象としたレジリエンス研究はみられるものの、その歴史は浅く、障害児の子育てを対象にしたものとなると、未だほとんどない。障害のある子どもを育てる過程において、母親が様々な困難な状況に置かれ危機的状況に陥る可能性が高いことは臨床的に明らかであるし、母親のストレスの高さは多くの研究結果によって示されて

* 中部大学現代教育学部現代教育学科

きた（例えば、北川・七木田・今塩屋、1995）。障害のある子をもつ母親の長期にわたる子育ての過程を支えるには、ストレスや困難な状況に対する一次的な軽減や問題解決的な対応だけでは不十分であり、母親のレジリエンスを支えるという視点、すなわち、障害のある子どもを育てる過程で、困難な状況に置かれ一次的に危機的状況に陥るもののそれを乗り越えていく過程、能力、結果を支えるという視点をもつことが不可欠である。

本稿では、障害のある子どもを育てる母親のレジリエンスに関する国内の研究を概観し、得られた知見を整理する。

2 方法

(1) 方法

以下の1)～5)の手順で対象論文を検索し内容を検討した結果、9件を分析対象とした。これらを各論文の主たる研究目的によって分類し、概要をまとめ、得られた知見を整理する。

- 1) Cinii（国立情報学研究所学術情報ナビゲータ）を用いて、「自閉 レジリエンス 親」「障害 レジリエンス 親」をキーワードとして検索した。

- 2) 題目に「自閉」または「障害」、「レジリエンス」、「親」の3つのキーワードすべてを含むものを抽出した。
- 3) 医学中央雑誌刊行会の分類を参考にし、原著論文ないし原著的内容・形式を有するものをすべて収集した。
- 4) 内容を吟味した結果、医療的な支援に焦点を置く重症心身障害児のみを対象にした2件を除外した。
- 5) 母親を対象としているかを確認し、父親のみを対象にした1件は除外した。保護者を対象に行った調査で、70名中2名の回答者が父親であったもの（柳井・木部・森永他、2014）は採用した。

(2) 対象論文

採用された9件の論文の筆頭著者、発表年、題目を発表年順に表1に示した。

3 対象論文の分類と概要

対象論文を主たる研究目的別にみると、(1) レジリエンスの構成要素を明らかにするもの (2) レジリエンスと諸要因との関連を明らかにするもの (3) レジリエンスに関する体験や様相を明らかにするもの

表1 対象論文一覧

No	著者	発表年	題目
1	橋本真規	2011	障害児を育てる母親のレジリエンスの実態—半構造化面接調査による質的研究
2	尾野明未	2011	障害児をもつ母親の子育てレジリエンスに関する研究
3	小川真奈美	2014	自閉症スペクトラム障害の児を持つ母親の苦悩とそれを乗り越えていく力（レジリエンス）についての文献的研究
4	柳井康子	2014	発達障害の長期予後（2）青年期の社会適応と母親のレジリエンスに着目して
5	五百蔵恵	2014	発達障害を持つ子どもを育てる母親のレジリエンスおよびソーシャルサポートが育児困難感および抑うつに及ぼす影響について
6	鈴木浩太	2015	自閉症スペクトラム児（者）をもつ母親の養育レジリエンスの構成要素に関する質的研究
7	柳井康子	2015	発達障害の青年をもつ母親のレジリエンス：レジリエンス高群・低群の語りの比較による予備的検討
8	尾野明美	2018	障害児をもつ母親への子育てレジリエンス促進プログラムの開発と評価の試み
9	細谷紀子	2019	災害時に支えとなり得る地域との繋がりを築いていくための支援の検討（第2報）発達障害児の親の地域社会生活におけるレジリエンス

の(4) レジリエンス支援プログラムの開発に関するものに分類できる。

以下に、各々の論文について概要をまとめる。

(1) レジリエンスの構成要素を明らかにするもの

橋本ら(2011)は、障害児を育てる母親のレジリエンスがどのような要素から成り立っているのかを明らかにすることを目的として、16～17歳の障害児を育てる母親3名を対象に面接調査を実施している。質問項目は、①子どもの診断告知を受け止めた時期、内容、受け止め ②その後の経過と受け止め ③現在の子どもの障害についての受け止め ④今までの子育ての中で一番辛かった時の内容 ⑤辛い時の自分なりの対処法 ⑥子育ての中で気持ちが変化した時期と内容 ⑦子育てにおいて気持ちを前向きにするために最も役立った事の7項目であり、自由回答により得られたデータを質的に分析している。その結果、レジリエンスは、ソーシャルサポートに代表されるような外部サポートを意味する《I have》と、個人がもつスキルを意味する《I can》の2要素から構成されることを明らかにし、さらに《I have》は4つの、《I can》には2つの要素から構成されることを以下のとおり示した。

《I have》は、【同じ立場の仲間の支え】【家族の支え】【友人の支え】【専門家の支え】の4つのカテゴリーに分けられる。【同じ立場の仲間の支え】は「話が出来る同じ立場の仲間がいる」「励ましてくれる同じ立場の仲間がいる」「体験談を話してくれる人がある」の3つのサブカテゴリーで構成される。【家族の支え】は、「育児を支えてくれる夫がいる」「精神的に辛い時を支えてくれる両親がいる」「子ども自身の存在が自分を支えてくれる」の3つのサブカテゴリーで、【友人の支え】は、「悩みを相談できる友達や人達がいる」の1つ、【専門家の支え】は、「具体的なアドバイスや適切な関わりをしてくれる専門家がいる」「親のふるまいを示唆してくれる先生がいる」の2つのサブカテゴリーで構成される。

《I can》は、【対人間問題解決スキル】【個人人間問題解決スキル】の2つのカテゴリーに分けられる。【対人間問題解決スキル】は、「人にしゃべる」「言いたいことはその場で言う」「自分から積極的に周囲に働きかける」「自分から専門家にアドバイスを

求める」「人に話し、相手の反応をみることで自分を知る」の5つのサブカテゴリーで構成される。また、【個人人間問題解決スキル】は、「やりがいを感じられる活動に取り組む」「気持ちを貯めこまずに発散する」「今後の見通しを持ちながら子育てをする」「環境を変えて気分転換する」「自ら何事も吸収しようとする」「日々の生活を楽しむ」「いつまでも引きずらず早いうちに解決する」「今を一生懸命やるしかない」「この子のことで今後いろいろあっても何とかなると思える」「嫌なことは忘れる」「何事にもどんと構えていられる」「自分自身でこの子を選んだと思える」の12のサブカテゴリーで構成される。

鈴木・小林・森山他(2015)は、「養育困難があるにも関わらず、良好に適應する思考過程」を養育レジリエンスと考え、その構成要素を明らかにすることを目的として、16歳以上の自閉症スペクトラム児・者をもつ母親23名に半構造化面接を行っている。乳幼児期から現在までの子育ての様子について聴取し、得られたデータを質的に分析した結果、【親意識】【自己効力感】【特徴理解】【社会的支援】【見通し】の5つのカテゴリーで構成される養育レジリエンスのモデルを提示している。

【親意識】は、子どもの親であることの意識「親としての自覚」、子どもががんばっていることの認知「子どものがんばりの認知」、子どもとつながっているという感覚「子どもとの連帯感」の3つの概念で構成される。【自己効力感】は、自身の子育ての効果がある(あった)という感覚「自己効力感」のみで、【特徴理解】は、子どもに障害があるという認識「障害認識」、子どもの特徴や行動の理解「子どもの特徴理解」、発達障害に関する一般的な知識「発達障害に関する知識」の3つの概念で構成される。【社会的支援】には、受容的態度で接してくれる人が周りにいるという認知「聴き手の認知」、困った時に助けてくれる人がいるという認知「支援者の認知」、子どもの障害や対応の仕方を十分に理解してくれない人や子育てに非協力的な人もいると認めている状態「無理解者の許容」の3つの概念が含まれる。【見通し】は、子どもの可能性、限界、行動に関する予測「子どもについての予測」、子どもを取り巻く環境の動向に関する予測「環境の予測」の2つの概念から構成される。

(2) レジリエンスと諸要因との関連を明らかにするもの

尾野・茂木（2011）は、障害児をもつ母親の子育てレジリエンスに影響を与える要因を検討することを目的として、15歳までの障害児をもつ母親135名を対象に質問紙調査を実施している。調査内容は、子育てレジリエンス、育児負担感、自己効力感と精神的健康度である。このうち子育てレジリエンスは、母親の子育てレジリエンス尺度（尾野・奥田・茂木，2011）が用いられ、これは、子どもに対して適宜に対応する能力や、家庭生活を支える上で必要な家事をこなす力に関する項目からなる「ペアレンタル・スキル」、周囲の人からの子どもの評価や理解を得るなど周りからのサポートにかかわる項目からなる「ソーシャルサポート」、母親として自分自身を肯定的に受け入れて、子どもや家族との関わりを楽しんでいる項目からなる「母性感情」の3因子で構成されている。

この結果、レジリエンス尺度のうち「ペアレンタル・スキル」が低いほど、また「母性感情」が弱いほど、育児負担感指標のうち「児に対する拒否感情」や「育児に対する拒否感情」が低くなることに影響することが明らかとなった。また、「ペアレンタル・スキル」が高いほど自己効力感が高くなり、精神的健康度が高くなる傾向があることが明らかになった。すなわち、「ペアレンタル・スキル」を高めることは、母親の自己効力感を育て子どもに対する拒否感情を取り除くことに有効であり、「母性感情」を育てることが、子どもと育児に対するネガティブな感情を取り除くことに効果的であることが示された。

また、子育てレジリエンスは子どもの人数や子どもの成長に影響されることがなく、母親の年齢によって促進されること、障害種別では、ダウン症、自閉症、知的障害の順に子育てレジリエンス得点が減少して、知的障害の子どもは、子育てレジリエンスの下位因子「ペアレンタル・スキル」において有意に得点が低いという結果も得られている。障害児の出生順位と子育てレジリエンスの関連では、第一子が健常児と第一子が障害児との場合では、健常児群で「ペアレンタル・スキル」が有意に高いことが確認された。

柳井・木部・森永他（2014）は、発達障害児を育てた中年期の母親のレジリエンス構造と青年期を迎えた子どもの社会適応の関連について、質問紙調査（回答者父親2名、母親68名）により検討している。親のレジリエンスの測定には、「状況分析能力」「心の強さ」「自己制御」「チャレンジ精神」の4因子から構成される「日本版レジリエンス尺度」（長内・古川，2005）が用いられ、子どもの社会適応の程度については、①職業や学校への所属 ②転校や転職 ③友人関係 ④異性関係 ⑤余暇 ⑥精神疾患と通院、服薬 ⑦保護者からみた適応 ⑧保護者からみた社会性に関する回答が点数化された。

子どもの青年期における社会適応の程度により親のレジリエンスが異なるのかどうかを調べたところ、子どもの社会適応の程度や診断名では有意差はなかったが、現在子どもが精神科に通院しているか否かでは有意差が認められた。親のレジリエンス尺度得点は、現在子どもが精神科に通院していない群の平均が通院している群の平均よりも有意に高かった。

また、レジリエンス尺度の項目について因子分析したところ、以下の4つの因子が得られた。第1因子は、状況を読み取り他者に合わせた行動がとれるという【状況分析能力】、第2因子は、感情に流されないなど自己をコントロールできるという感覚【自己制御能力】、第3因子は、好奇心旺盛で、他者の援助を積極的に借りることができるという【行動力】、第4因子は、長内ら（2005）の先行研究を踏襲して【心の強さ】と命名された。これら4つの因子を、子どもが精神科に通院している群とそうでない群の2群間で比較した結果、【自己制御能力】のみで有意差が認められ、精神科に通院している群の平均値が通院していない群の平均値よりも有意に低かった。

五百蔵・山口（2014）は、発達障害を持つ子どもを育てる母親のソーシャルサポートとレジリエンスが育児における困難感や抑うつ軽減に効果があるのかを検討している。発達に遅れをもつ0歳から18歳の子どもを育てる母親157名に対し、育児困難尺度、ソーシャルサポート尺度、レジリエンス尺度として小塩ら（2002）の精神的回復力尺度、うつ病自己評価尺度を用いた質問紙調査を行った。

レジリエンス尺度として用いた精神的回復力尺度について因子分析を行ったところ、【肯定的な未来志向】【新奇性追求】【感情調整】の3因子が抽出された。【肯定的な未来志向】は、「自分の将来に希望をもっている」「自分の未来にはきっといいことがあると思う」「将来の見通しは明るいと思う」「自分には将来の目標がある」などの項目、【新奇性追求】は、「色々なことにチャレンジするのが好きだ」「私は色々なことを知りたいと思う」「新しいことや珍しいことが好きだ」「もともとに対する興味や関心が強い方だ」などの項目、【感情調整】は、「怒りを感じるとおさえられなくなる（※逆転項目）」「その日の気分によって行動が左右されやすい（※）」「動揺しても、自分を落ち着かせることができる」「つらい出来事があると耐えられない（※）」「自分の感情をコントロールできる方だ」などの項目で負荷が高かった。

またレジリエンスの影響についてはパス図から、直接的ならびに間接的に感情調整が、直接的に肯定的な未来志向が、間接的に新奇性追求が抑うつ傾向を低減させることが示唆された。また、感情調整は集団適応の遅れへの困難感を直接的に低減させることも示唆された。

柳井（2015）は、幼児期または児童期に発達障害と診断され（初診時IQ70以上）現在は青年期を迎えた子どもを持つ母親19名にインタビュー調査を実施し、質的分析を行った。長内ら（2005）をもとに作成したレジリエンス尺度を用い、レジリエンス高群と低群に分けて、高等教育以降から就労に関するエピソードについての語りを比較している。

高等教育終了後の就労に関するエピソードを抽出して分析した結果、①就職活動の苦勞②就労先の誘導③誘導の難しさ④進路の葛藤⑤影で支える⑥長所に気づく⑦能力の限界に気づく⑧子どもの受容⑨他者の力を借りる⑩専門家への不満⑪就労継続の不安⑫自立への不安⑬子育ての負担感⑭子から学ぶ⑮子育ての反省⑯今後期待する支援の16のカテゴリーが得られた。

レジリエンスが高い群と低い群の2群間の語を比較したところ、「⑧子どもの受容」のカテゴリーに該当する語りはレジリエンス高群のみで、「⑩専門家への不満」「⑭子から学ぶ」に該当する語りはレ

ジリエンス低群のみで認められた。「⑧子どもの受容」は、子どもの今の状態に親として決して満足しているわけではないが、ありのままを受け入れようとしている発言、「⑩専門家への不満」は、専門家の支援を得てはいるものの、その支援に対しての不満が語られたエピソード、「⑭子から学ぶ」は、子どものおかげで自身が親として成長できたという語りである。

また、「②就職先の誘導」では、高群の母親の方が直接企業側に働きかける行動が多く、「⑤影で支える」では、子どもの適職のイメージを明確に持ち、その実現に向けて、強引にではなく裏で動きながらタイミングを見て子どもに働きかける姿は低群の母親には見られなかったといった差もみられた。

(3) レジリエンスに関する体験や様相を明らかにするもの

小川・本郷（2014）は、自閉症スペクトラム障害（ASD）の子どもを持つ母親の苦悩の実態、長期間の苦悩を母親が受理していく過程、母親の苦勞を乗り越えていく過程を明らかにすることを目的として、ASDの子どもを持つ母親の苦悩とそれを乗り越えていく力（レジリエンス）に注目した文献をレビューしている。文献は、2002年～2012年の11年間について、医学中央雑誌Web、Ciniiでキーワードを「発達障害」「家族」「看護」として収集され、研究目的によって選別された21件が分析対象とされた。

対象論文は、注目する内容によって、ASDの子どもの特徴に注目した【ASDの子どもについての認識形成】、ASDの子どもを持つ母親のストレスやその時の気持ちに注目した【母親のストレスと苦悩】、障害を持った子どもを自分の子どもとしてあるがままに受け入れていき、育児を楽しみ、障害に応じて育てていく過程に注目した【障害の受容過程】、乗り越えていくきっかけや周囲との関係性に注目した【母親の乗り越えていった経験とレジリエンス】、医療を含めた社会支援の必要に注目した【検討されるべき課題】に分類された。

このうち、【母親の乗り越えていった経験とレジリエンス】に分類された文献は、さらに「診断告知態度の要因」「子どもとの関係性形成」「親の内的要

因〕[社会的要因]に分類された。[診断告知態度の要因]に注目した文献では、身近にいる医療者に理解してもらえたこと、子どもに丁寧に説明するだけでなく親にも配慮してもらえたこと、大丈夫かどうか子どもだけでなく親にも配慮してもらえたことなどの経験が医療者への信頼を増させ、告知を受けた後、前向きに育児に取り組むエネルギーとなっていた。[子どもとの関係性形成]に注目した文献では、母親が子どもとの接し方がわかるようになるなど子どもとの関係性形成により、前向きに変化している親の姿が報告されていた。[親の内的要因]に注目した文献では、告知前にダウン症の知識を持っていた親は、より早い時期に養育に積極的になる傾向が報告されていた。[社会的要因]に注目した文献では、サポート源に対して満足度の高い人は、自分の子どもの障害に対する前向きな取り組みも高いことを示していた。

細谷・石丸・宮崎（2019）は、発達障害児の親の地域社会生活における困難な体験に対するレジリエンスを明らかにするため、自閉症スペクトラム障害または注意欠如・多動性障害がある（併存含む）中等度以上の知的障害のない3～12歳の子を育てる母親10名を対象に、半構成的面接調査を行った。地域社会で生活している中で生じた困難やストレスと、その困難やストレスに対する考えやとった行動、活用した資源、その後の変化に関する語りを聴取し、プロセスを軸にして分析している。

地域社会生活における困難な体験は、【学校・幼稚園の教員や保育士の障害の理解のなさ和不適切な子どもへの対応に不信・不満を感じる】【身近な人に説明しても理解が得られず深く傷つく】【周りの親から距離を置かれていると感じ自分の壁を壊せない】など12カテゴリーあった。これらの困難な体験に対して、48サブカテゴリー、16カテゴリーのレジリエンスがみられ、これらはさらに困難への直面を起点とした時間経過に沿って、「始めの頃からみられたレジリエンス」「途中からみられたレジリエンス」、困難からの立ち直りや成長に至る時期である「終わりの頃にみられたレジリエンス」に分けて考えられた。

「始めの頃からみられたレジリエンス」には、【状況把握のための行動を起こし相手方や専門家に対応

や支援を求める】【仲間や家族に相談し精神的支えを得る】【自分の感情を処理する】（「いっぱい泣く」など）【無理をして頑張ってみる】【子どもに向き合い一緒に戦う】（「子どもと一緒に対応を考える」など）【子どもの行動の意味がわかっている】があった。

「途中からみられたレジリエンス」には、【子どもの特性や障害に対する認識・親の役割の考え方が変わる】【子どもに合わせて対応を変え無理をさせないようにする】【相手の感情や親の責任を考え相手に謝る】【子どものことを周りの人に説明する】【相手の考えや行動の理由がわかる・理解が得られない人からは積極的に離れる】があった。

「終わりの頃にみられたレジリエンス」には、【理解が得られない人が多い中、わかってくれて見守り支えてくれる人ができ救いとなる】【子育てで大事なこと（学校や地域との良い関係の中で育てる・子どもの話をよく聞き信じる・気軽に相談する）の核心と力の獲得】【学校・円や親自身の対応が変わり、周りの子どもの接し方も変わり、子どもの困難が解決する・親も立ち直る】【自信や余裕ができ楽になる・他の親子の役に立ちたいと思う】があった。

(4) レジリエンス支援プログラムの開発に関するもの

尾野・奥田（2018）は、幼稚園と小学生の障害児をもつ母親7名（ダウン症3名、自閉症スペクトラム障害4名）を対象に、母親の子育てレジリエンスを高めることを目的として、6回のセッションで構成される親のレジリエンス促進プログラムを実施した。第1、2回は、自分の良さを再確認するなど「母としての肯定感」を促進すること、第3、4回は、子育てに柔軟に対応する「ペアレンタル・スキル」の促進、第5、6回はサポートシステムを構築する「ソーシャルサポート」の促進を目的として、話し合いの中から学ぶ参加型学習方法が用いられた。

毎セッション後に、子育てレジリエンス尺度、育児ストレス認知尺度、精神的健康度が測定された結果、子育てレジリエンスが介入前より上がり、育児ストレス認知度が減り、精神的健康度が漸進的に高まった。また、この結果が最も顕著だったのは、「身近なソーシャルサポートに気づく」という目的で夫へ思うこと、感じていることを自由に話し合っても

らった回であった。

また、講座終了時の感想文では、【子育てスキルの獲得】【ソーシャルサポートの促進】【母としての肯定感の強化】【障害受容】【講座の評価】に関する記述がみられた。中でも【ソーシャルサポートの促進】に関する記述が最も多く、[同じ悩みを持つ仲間との出会い][話せる場][周囲からの支援の再確認]に関する記述がみられた。次に多かったのが【母親としての肯定感の強化】であり、中でも「子育てに前向きになった」という趣旨の記述が多くみられた。

4 得られた知見の整理

障害のある子どもを育てる母親のレジリエンスについて、9件の対象論文から得られた知見を整理すると、(1) レジリエンスの構成要素 (2) レジリエンスに影響を与える要因 (3) レジリエンスが及ぼす効果 (4) レジリエンスの高低による差の4つの視点から整理できる。

以下に、(1) ～ (4) のそれぞれの視点から得られた知見を抽出し、簡潔にまとめて列挙する。

(1) レジリエンスの構成要素

①母親による語りから

- ・ 障害児を育てる母親のレジリエンスは、外部サポートである【同じ立場の仲間の支え】【家族の支え】【友人の支え】【専門家の支え】と内的スキルである【対人間問題解決スキル】【個人間問題解決スキル】から構成される（橋本ら、2011）
- ・ 自閉症スペクトラム児・者をもつ母親の養育レジリエンスは、【親意識】【自己効力感】【特徴理解】【社会的支援】【見通し】から構成される（鈴木ら、2015）
- ・ 発達障害児の母親のレジリエンスには、始めの頃からみられるもの、途中からみられるもの、終わりの頃にみられるものがある（細谷ら、2019）
- ・ 発達障害児の母親に始めの頃からみられるレジリエンスには、【状況把握のための行動を起こし相手方や専門家に対応や支援を求める】などがあり、途中からみられるレジリエンスは、【子どもの特性や障害に対する認識・親の役割の考え方が変わ

る】など、終わりの頃にみられるのは【子どもに合わせて対応を変え無理をさせないようにする】などがある（細谷ら、2019）

②既存のレジリエンス尺度を用いたアンケート調査から

- ・ 「日本版レジリエンス尺度」（長内ら、2005）から、発達障害児を育てた中年期の母親のレジリエンスについて【状況分析能力】【自己制御能力】【行動力】【心の強さ】の4因子が抽出された（柳井ら、2014）
- ・ 精神的回復力尺度（小塩ら、2002）から、発達障害を持つ子どもを育てる母親のレジリエンスについて【肯定的な未来志向】【新奇性追求】【感情調整】の3つの因子が抽出された（五百蔵ら、2014）

③文献から

- ・ 自閉症スペクトラムの子どもをもつ母親が苦悩を乗り越えていった経験とレジリエンスに注目した論文は、[診断告知態度の要因][子どもとの関係性形成][親の内的要因][社会的要因]に注目して書かれているものに分けられる（小川ら、2014）

(2) レジリエンスに影響を与える要因

- ・ 障害児をもつ母親の子育てレジリエンスは母親の年齢によって促進される（尾野・茂木、2011）
- ・ 障害児をもつ母親のレジリエンスはダウン症、自閉症、知的障害の順に減少する（尾野・茂木、2011）
- ・ 知的障害児の母親は、子育てレジリエンスの下位因子のうち、家事をこなす力に関する項目からなる「ペアレンタル・スキル」の得点が低い（尾野・茂木、2011）
- ・ 第一子が健常児と第一子が障害児との場合では、健常児の場合の方が「ペアレンタル・スキル」が有意に高い（尾野・茂木、2011）
- ・ 告知の際、親や子が医療者から配慮を受けた経験は、告知後の前向きな育児のエネルギーとなる（小川ら、2014）
- ・ 自閉症スペクトラムの子どもをもつ母親について、子どもとの関係性形成により、前向きに変化している親の姿が報告されている（小川ら、2014）

- ・自閉症スペクトラムの子どもをもつ母親について、告知前にダウン症の知識を持っていた親は、より早い時期に養育に積極的になる傾向が報告されている（小川ら、2014）
- ・自閉症スペクトラムの子どもをもつ母親について、サポート源に対して満足度の高い人は、自分の子どもの障害に対する前向きな取り組みも高いことが示されている（小川ら、2014）
- ・障害児をもつ母親に対するレジリエンス支援プログラムのうち、特に、「身近なソーシャルサポートに気づく」ことに取り組んだ回に、子育てレジリエンス得点が最も高まった（尾野ら、2018）
- ・障害児をもつ母親に対するレジリエンス支援プログラムの感想では、【ソーシャルサポートの促進】【母としての肯定感の強化】に関する記述が多くみられた（尾野ら、2018）

(3) レジリエンスが及ぼす効果

- ・レジリエンス尺度のうち「ペアレンタル・スキル」を高めることは、障害児をもつ母親の自己効力感を育て、子どもに対する拒否感情を取り除くことに有効である（尾野・茂木、2011）
- ・障害児をもつ母親について、レジリエンス尺度のうち「母性感情」を育てることが、子どもと育児に対するネガティブな感情を取り除くことに効果的である（尾野・茂木、2011）
- ・発達障害を持つ子どもを育てる母親について、直接的ならびに間接的に感情調整が、直接的に肯定的な未来志向が、間接的に新奇性追求が抑うつ傾向を低減させる（五百蔵ら、2014）
- ・発達障害を持つ子どもを育てる母親について、感情調整は集団適応の遅れへの困難感を直接的に低減させる（五百蔵ら、2014）

(4) レジリエンスの高低による差

- ・青年期の発達障害児の親のレジリエンスは、現在子どもが精神科に通院していない群の方が通院している群よりも有意に高い（柳井ら、2014）
- ・青年期の発達障害児の親のうち、現在子どもが精神科に通院している親の方が、通院していない親よりも【自己制御能力】が低い（柳井ら、2014）
- ・発達障害児の就労に関して母親が語るエピソード

のうち、「子どもの受容」に該当する語りはレジリエンスが高い群のみに見られた（柳井、2015）

- ・発達障害の子ども就労に関して母親が語るエピソードのうち、「専門家への不満」「子から学ぶ」に該当する語りはレジリエンスが低い群のみに見られた（柳井、2015）。
- ・発達障害の子ども就労に際して、直接企業側に働きかける行動はレジリエンスの高い母親に多かった（柳井、2015）
- ・発達障害の子ども就労に際して、レジリエンスが低い母親には、子どもの適職のイメージを明確に持ちその実現に向けて強引にではなく裏で動きながらタイミングを見て子どもに働きかける姿が見られなかった（柳井、2015）

5 まとめ

障害のある子どもを育てる母親のレジリエンスについて、国内では2011年から研究成果がみられるようになり、レジリエンスの構成要素、レジリエンスと諸要因との関連、レジリエンスに関する体験や様相を明らかにすることを目的としたものについて、2018年にはレジリエンス支援プログラムの開発に向けた実践と検証が行われるようになってきている。

これらの研究結果には、障害のある子どもを育てる母親のレジリエンスは、社会的サポート、個人の考え方や感じ方、スキルや能力等から構成されることや、「診断告知」「就労」など障害児の子育てに特有の困難な状況が関与することなどが明らかにされていた。また、レジリエンスの高さが抑うつ傾向軽減させることなど、レジリエンスを高めることによって得られる効果があり、支援プログラムによってそれが期待できることなどが示されていた。

障害のある子どもを育てる母親のレジリエンスに焦点を置いた研究、実践は始まったばかりである。今後は、先行研究や得られた知見を関連付けていくこと、具体的な支援の方法の検討、実践と効果の検証を積み重ねていく必要がある。

本研究は、2019年度特別研究費（課題番号19L11A）の助成を受けた。

引用文献

- 橋本真規・橋本陽介・熊井正之（2011）障害児を育てる母親のレジリエンスの実態—半構造化面接調査による質的研究—教育情報学研究, **10**, 1-13.
- 細谷紀子・石丸美奈・宮崎美砂子（2019）災害時に支えとなり得る地域との繋がりを築いていくための支援の検討（第2報）発達障害児の親の地域社会生活におけるレジリエンス 千葉看護学会会誌, **24**(2), 43-53.
- 五百蔵恵・山口一（2014）発達障害を持つ子どもを育てる母親のレジリエンスおよびソーシャルサポートが育児困難感および抑うつに及ぼす影響について 桜美林大学心理学研究, **5**, 29-45.
- 石毛みどり（2005）中学生におけるレジリエンスと無気力感の関連 お茶の水女子大学人間文化論叢, **6**, 243-252.
- 北川憲明・七木田敦・今塩屋隼男（1995）障害幼児を育てる母親へのソーシャルサポートの影響 特殊教育学研究, **33**(1), 35-44.
- 小塩真司・仲谷素之・金子一史・長峰伸治（2002）ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理特性—精神的回復力尺度の作成— カウンセリング研究, **35**(1), 57-65.
- 小川真奈美・本郷久美子（2014）自閉症スペクトラム障害の児を持つ母親の苦悩とそれを乗り越えていく力（レジリエンス）についての文献的研究 三育学院大学紀要, **6**(1), 81-90.
- 長内綾・古川真人（2005）レジリエンスと日常的ネガティブライフイベントとの関連 昭和女子大学生活心理研究所紀要, **7**, 28-38.
- 尾野明未・茂木俊彦（2011）障害児をもつ母親の子育てレジリエンスに関する研究 心理学研究：健康心理学専攻・臨床心理学専攻, **2**, 67-77.
- 尾野明未・奥田訓子・茂木俊彦（2011）子育てレジリエンス尺度の作成 ヒューマン・ケア研究 **12**(2), 98-108.
- 尾野明美・奥田訓子（2018）障害児をもつ母親への子育てレジリエンス促進プログラムの開発と評価の試み Journal of Health Psychology Research, **31**, 259-265.
- Rutter, M. (1985) Resilience in the face of adversity: protective factors and resilience to psychiatric disorder. British Journal of Psychiatry, **147**, 598-611.
- 鈴木浩太・小林朋佳・森山花鈴・加我牧子・平谷美智夫・渡部京太・山下裕史朗・林隆・稲垣真澄（2015）自閉症スペクトラム児（者）をもつ母親の養育レジリエンスの構成要素に関する質的研究 脳と発達, **47**(4), 283-288.
- 柳井康子（2015）発達障害の青年をもつ母親のレジリエンス：レジリエンス高群・低群の語りの比較による予備的検討 白百合女子大学発達臨床センター紀要, **18**, 17-26.
- 柳井康子・木部則雄・森永良子・黛雅子・依田十久子・緒方千加子・秋元有子・紺野道子・中石康江・池上雅子・浅沼由美子（2014）発達障害の長期予後（2）青年期の社会適応と母親のレジリエンスに着目して 白百合女子大学発達臨床センター紀要, **17**, 41-50.

受付日 2019年9月30日

受理日 2019年10月29日